

モンゴル自然史博物館における「Mongolian Wildlife: Findings of Japan-Mongolia Joint Team」展の開催についての記録

麻布大学獣医学部教授 高槻成紀

7月5日

展示室の最終確認。林東京大学総合研究博物館館長とウランバートルを訪れる。モンゴル自然史博物館のミャンダス管理官とツォゴ研究員の出迎えを受ける。高槻は博物館の展示室で最終確認をする。博物館では常設展示をおこなっており、その一室を借りて展示をおこなうことになった。会場となる部屋はスクリーンのための白いシートが張られ、その脇には野生動物の写真が張られていた。

向かいの壁には6つのショーケースが並べられ、5つには哺乳類の頭骨が展示され、ひとつには動物と植物の写真のファイルが置かれていた。



展示室（入口側より）



展示室（奥より）



ショーケース1から3



ショーケース4から6

同じ壁の中央にはスライドを見るためのベンチが置かれ、背後に動物や草原の景観写真が貼られていた。



スライドを見るためのベンチ

入口側の壁には挨拶文を書いたパネルがあり，その上に看板が置かれていた．脇の壁にはシカやアルガリ（野生羊）などの頭骨が飾られていた．これに向かい合う奥の壁には日章旗とモンゴル国旗が張られていた．



入口の壁と挨拶文



側壁のトロフィー

ショーケースの内容は以下のとおりである．

ケース1にはアカシカの枝角とタビ（モウコノウマ），ケース2にはアイベックスろアルガリ，ケース3にはトナカイとヘラジカをそれぞれ展示した．ケース4にはフタコブラクダ，フラン（モウコノロバ），イノシシ，コウジョウセンガゼル，サイガ，モウコガゼル，ケース5にはヒグマ，ヤマネコ，オオカミなど肉食獣とノウサギ，齧歯類を展示した．ケース6にはモンゴル国内での動植物の地方名（方言）を知るために，主要な動植物の写真をラミネート加工したシートをファイルにし，来館者に質問することにした．ケースには手前情報に蛍光灯によるライティングをした．



ケース1



ケース2



ケース3



ケース4



ケース5



ケース6

ケース6には動物と植物のファイルを置いた.



動物写真ファイル



植物写真ファイル

最後に標本の配置などをチェックしたあと全面のガラスを入れた. プロジェクターの作動などをチェックした.



ガラスを入れる職人

7月6日

自然史博物館を訪問し、外観を撮影した。ロシア風の重厚感のある建物である。正面玄関の上に今回の展示を案内する幕が張られていた。



モンゴル自然史博物館

林館長とともにモンゴル自然史博物館ゾリグトバートル館長を表敬訪問する。館長同士これまでの経緯について話し合いがあり、ゾリグトバートル館長からは今回の展示に対する協力に感謝の意が表された。



左：林東京大学総合研究博物館館長とゾリグトバートル・モンゴル自然史博物館館長

右：左よりツォゴ研究員，ラグバスーレンモンゴル科学アカデミー教授，高槻麻布大学教授，林東京大学総合研究博物館館長，ゾリグトバートル・モンゴル自然史館長，ミヤングス管理官

11時より開会式が行われた。モンゴル科学アカデミー，国立公園関係者，Patrisia D. Moehlman博士など野生動物研究者や支援機関関係者などが集まった。始めにモンゴル科学アカデミーのチャドラー所長から挨拶があり，次に市橋康吉特命全権日本大使から祝辞が述べられた。そして林館長から挨拶があった。その後ゾリグトバートル館長からお礼が述べられ，林館長と高槻教授に感謝盾が贈呈された。最後に高槻教授から挨拶と，展示の解説がおこなわれた。挨拶は英語でおこなわれ，ラグバスーレン教授がモンゴル訳した。



モンゴル科学アカデミーのチャドラー所長



市橋日本大使



林東京大学総合研究博物館館長



表彰盾を掲げる館長



林館長



高槻教授

高槻教授の解説では、まず頭骨標本の説明がおこなわれた。この際、タヒ（モウコノウマ）の復活に貢献しているフスタイ国立公園のバンディ公園長からタヒについての説明を受けた。



バンディ・フスタイ国立公園長

次に日本・モンゴル共同隊によるこれまでの野生動物生態学の研究成果が紹介された。すなわちモウコガゼルの捕獲と衛星を利用した発信機による移動ルートの解明、食性分析、フラン（モウコノロバ）の捕獲、シベリアマーモットによる生態系エンジニアとしての生物多様性を高める機能についての研究などである。展示ではこれらの内容を5分ほどのスライドにまとめこれを投影した。プロジェクターは2台あり、ひとつは英語、もうひとつはモンゴル語の解説をつけた。



スライドによる投影の例

高槻教授はこの説明の中で、この展示が成功裏に終わった場合、本来の目的であるモンゴルの地方の人々や子供にこの展示を見てもらうため、東京大学総合研究博物館でおこなっている「モバイルミュージアム」構想を実現したいという希望を述べた。



左よりラグバスー縁教授，林館長，高槻教授，ゾリグトバートル館長，バンディ公園町，ミャンダス管理官

モンゴル自然史博物館において海外との共同研究の成果が展示されたのはこれが初めてであり、来館者がモンゴルの野生動物の魅力とその保全の必要性を認識する上で本展示の試みは大きな成果があることが期待される。